

南山大学大学院 入学試験問題集

人間文化研究科
人類学専攻

2026年度・春季

NANZAN
UNIVERSITY

目 次

《博士前期課程》

基礎知識に関する筆記試験	(文化人類学) ……………	1
	(考古学) ……………	2
外国語に関する筆記試験		
英語	(文化人類学) ……………	3
英語	(考古学) ……………	5
西語	(文化人類学) ……………	6
西語	(考古学) ……………	7
中国語	(文化人類学) ……………	8
中国語	(考古学) ……………	9
日本語	(文化人類学) ……………	10
日本語	(考古学) ……………	13
小論文	(文化人類学) [社会人入学審査] ……………	15
	(考古学) [社会人入学審査] ……………	16

《博士後期課程》

専門領域に関する筆記試験	(文化人類学) ……………	17
	(考古学) ……………	18
外国語（英語）に関する筆記試験	(文化人類学) ……………	19
	(考古学) ……………	22

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：基礎知識 (文化人類学)

配点：100点

(問題紙) 以下の設問に日本語で解答してください。

設問 I. 現代世界における国境を越えた人の移動について、文化人類学の観点から論じなさい(1000字程度)。

設問 II. 以下の5つの項目から3つ選択して、それぞれについて説明しなさい(20点ずつ)。

- (1) 民族誌的現在 (2) 世界システム論 (3) Geertz, Clifford
(4) 『未開社会の構造と機能』 (5) 巡礼

以上

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：基礎知識 (考古学)

配点：100点

(問題紙)

設問 1. 考古学における「分類」と「系統」概念について、400字程度で説明しなさい。

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：外国語 (英語 (文化人類学))

配点：100点

(問題紙)

次の文を読み、下記の設問に解答しなさい。

著作権の関係により掲載しておりません

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：外国語 (英語 (文化人類学))

配点：100点

著作権の関係により掲載しておりません

出典：Clifford Geertz 1973 *The Interpretation of Cultures*, Basic Books. (一部変更、下線は引用者が記入)

【設問】

- (1) 下線部①の two characteristics を、解答紙4行程度で説明しなさい。
- (2) 下線部②の The term “culture” の概念定義に相当する部分を、本文から抜き書きしなさい (英文のままでもよい)。
- (3) 問題文全体の要旨を解答紙6行程度にまとめなさい。

(問題紙)

以下の英文をわかりやすい日本語に翻訳しなさい。

In archaeological landscape and sites studies, drones are regularly applied to collect imagery using visible-light imaging (photography). Such images are used either directly or to photogrammetrically create 3D representations of present archaeological features. Furthermore, they are used as remote sensing technique for archaeological prospection purposes. In the first case, the results are used as complementary 3D information as additional documentation, analysis and visualisation purposes, but there are also new prospects for research into diachronic archaeological site topography, such as that developed in the Archaeology of Archaeology approach. In the second case, their application fills a niche for low-altitude and high-resolution data collection between terrestrial and airplane- or satellite-based data collection platforms. This development is consistent with prior research that has utilized alternative platforms for analogous objectives in recent years.

In the context of archaeological excavation, the main focus of drone remote sensing has been on their deployment as platforms for the collection of photographic material. These are, again, either used directly or they are photogrammetrically postprocessed to create orthomosaics, 3D surface meshes, and digital elevation models. Such photos and models are then used for documentation, analysis, and visualisation purposes, often demonstrating significant potential for improving the archaeological process. In that sense, the deployment of drones at excavations can be firmly placed in a tradition of documentation using (digital) cameras and 3D scanning devices for advanced site recording, often connected to exploration and/or implementation of so-called paperless-archaeology approaches.

However, on the level of excavation, the deployment of drones for remote sensing beyond visible-light imaging has seen little application. The authors contend that deployment of drones as remote sensing device with different types of sensors over the archaeological trench holds great promise. Moreover, the excavation context serves as an appropriate 'laboratory' for evaluating the interactions between different recorded signals, present archaeology, and the sediment matrix, the latter through sedimentological sampling and analysis. This paper will demonstrate that potential in the context of drone remote sensing deployment over an excavation site of Iron Age and Roman period habitation in Veldhoven, The Netherlands.

(問題紙)

次の文章を全て日本語に訳しなさい。

著作権の関係により掲載しておりません

(出典) de María Angélica Salas 1996 *Papas y cultura: acerca de la interacción de sistemas de conocimiento en los Andes del Perú*

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：西語 (考古学)

配点：100点

(問題紙)

次の文章を全て日本語に訳しなさい。

著作権の関係により掲載しておりません

(出典) Arturo Ruiz Estrada 2010 Amazonas: arqueología e historia

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：外国語 (中国語 (文化人類学))

配点：100点

(問題紙)

以下の中国語文を読んで、設問1と設問2に答えなさい。

著作権の関係により掲載しておりません

(段宝林「民間文化与先進文化」『文化学刊』2006年第1期より抜粋)

設問1 中国語文の全文を日本語に翻訳しなさい。(80点)

設問2 この中国語文について、中国語による適切なタイトルを考えなさい。(20点)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：外国語 (中国語 (考古学))

配点：100点

(問題紙)

以下の中国語文を読んで、設問1と設問2に答えなさい。

著作権の関係により掲載しておりません

(段宝林「民間文化与先進文化」『文化学刊』2006年第1期より抜粋)

設問1 中国語文の全文を日本語に翻訳しなさい。(80点)

設問2 この中国語文について、中国語による適切なタイトルを考えなさい。(20点)

アクターネットワーク理論 (ANT) とは、ブリュノ・ラトゥール、ミシェル・カロン、ジョン・ロウらによって展開されてきた理論的な立場のことである。ANT は、もともと科学技術社会論のなかから生まれてきたが、その裾野は近年ますます広がっており、日本語でも盛んに紹介されるようになってきている。そこで本項では、人類学における受容と展開を意識しながら、ANT の基本的な発想を紹介することにしよう。

ANT を日常的な言葉で説明するならば、特定の現象がどのように可能になっているのかをアクターのネットワークによって説明する理論ということになる。しかし、これではほとんど何の説明にもなっていない。ANT を理解するためには、ここでの「アクター」がどのようなものとして想定されているかについて知る必要がある。

まず、通常、アクター (行為者) と聞くと、われわれは、「行為を行う人」のことだけを指すものだと考えがちである。しかし、ANT ではアクターのなかに人間だけでなく、モノや動植物などの非人間も含めて考える。モノや動植物といった非人間は、人間による働きかけや意味づけを待っているだけの受動的な存在ではなく、人間の行為や態度や認識を方向づける力を持ちうる、と ANT では考える。要するに、人間と非人間を同じ資格で扱おうとするのである。

次に、アクターのネットワークと聞くと、通常、個々のアクターはネットワークに先立って、それとは無関係に存在していると考えがちである。別々に存在するアクターが集まってネットワークを形成しているというのである。しかし、ANT ではアクターをネットワークと不可分のものとする。ネットワークはアクターが寄り集まってできているようにも見えるが、実際は、ネットワークが存在するからこそ、アクターは作用することができるからである。充電する機会とも電波の中継局とも結びついていない携帯電話は、もはや携帯電話とは呼べない別の何かだろう。

アクターを人間に限定せず、また、ネットワークから独立したものと考えないことによって、ANT では、モノや機械や動植物や制度と人間が寄り集まって形成されるネットワークによって特定の現象がいかんして可能委成っているのかを説明しようとする。では、どうしてこのような説明の仕方が必要とされたのだろうか。あるいは、このような説明の強みはどこにあるのだろうか。

この点について理解するためには、ANT 以前の科学技術社会論においてどのような議論がされてきたかを知る必要がある。新しい科学技術の導入について説明する際に、われわれは、それを政治的な思惑や社会的な要請とは無関係に起きる純粋に技術的な現象だと考えがちである (技術決定論)。あるいは、そのような発想に対する反省から、科学技術の発展はむしろ政治的な思惑や社会的な要請に従っているのであり、科学や技術にいかなる自律性も認めないという立場がある (社会構築主義)。

ANT は、これらの二つの極端な立場のいずれをも拒否する。科学技術の発展によって何かが可能になるとしても、もしそれを利用する人が誰も存在しないのであれば、そのような技術は忘れ去られてしまうだろうし、そもそも多大な労力をかけて開発されることもないだろう。反対に、科学技術によって可能になることのすべてが予め人々にとって利用価値のあることに限定されているわけでもない。科学技術による真の革新は、人々の予想を超えるような形で社会や人々の生活を変容させていく点にあるのであって、単にこれまでよりも効率的に物事を進められるようになることにあるのではない。あるいは、特定の目的のために作られた技術が他の目的を達成するために転用されて姿を変えることも珍しくはない。

重要なのは、特定の現象がどのようにして可能になっているのかを、自然や技術にも、文化や政治にも還元せず、両者がどのように絡み合いながら現実が作り出されているのかを丹念に追っていくことである。【原文の一部を省略】

ANT においては、特定の場所で特定の現象が起きているとわれわれが把握できる理由について、技術決定論

とも社会構築主義とも異なるやり方で説明していく。【原文の一部を省略】このような説明の仕方が人類学に与えた影響として、ここでは二つのことを挙げておこう。

まず、ANTは文化や意味づけによる説明の代替物を提供するものである。従来的人类学では、地域が独自に育んできた比較的安定的な意味の体系によって、人々の行為を説明することが多かった。これに対してANTでは、アクターのネットワークがそのような意味の体系を変容させる状況を説明することができる(浜田 2012)。これは、グローバル化に伴って技術や情報の移動が盛んになるなかで、目まぐるしく変化する人々の行為を説明するための方法を人類学者に提供することになった。

ANTが人類学に与えたもう一つの大きな影響は、自然と文化の区分の自明性を揺るがしたことにある。既存の人類学的研究の多くは、自然と文化の区分そのものを普遍的なものとして自明視してきた。例えば、人間が生まれてから死ぬまでの過程は生物学的に決定される自然で普遍的なものであるが、子どもが一人前の大人となる時期や、そのために必要とされる手続き、あるいは子どもと大人に与えられる役割については時代や場所によって異なる、文化的なものと考えられてきた(慶田 1994)。これは、自然の過程を単一のものとしたうえで、それに対する意味づけは文化によって異なるという発想であり、普遍的な自然の領域と複数性をもった文化の領域を区別することができるという前提に依拠した発想である。それに対して、ANTは、自然に属するとされるものと文化に属するとされるものが絡まり合いながら形成されるネットワークに注目することによって、自然と文化の区分は必ずしも自明視できないことを明確にした。

【問題となる文章は以上】

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士前期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：外国語 日本語 (文化人類学)

配点：100点

(問題紙) 以下の文章を読んで、設問にすべて解答しなさい。

設問Ⅰ この文章を15行程度に要約しなさい。

設問Ⅱ 傍線部「自然と文化の区分は必ずしも自明視できないこと」について、問題文をふまえ、具体的な事例を挙げて説明しなさい。

以上

出典：浜田明範「アクターネットワーク理論以降の人類学」(前川啓治ほか『21世紀の文化人類学—世界の新しい捉え方』新曜社、2018年、所収)

(問題紙)

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

象徴的認知能力をもっていることは、現生人類の認知能力がそれ以外の人類と大きく異なっている点のひとつである。記号やシンボルを操り、メタファーによってさまざまな現象を理解し、抽象的な概念を用いて思考することによって、人間は宗教や科学を生みだしてきた。現生人類に勝るとも劣らない大きさの脳をもっていたネアンデルタール人が残した遺跡には、こうした象徴的認知能力を明確に示す証拠が乏しい。ホモ・サピエンスがアフリカからヨーロッパに進出した後、ネアンデルタール人はまもなく絶滅してしまった。そして、ホモ・サピエンスは全世界に拡散し、多様な環境に適応したのである。この優れた適応力は、個人の認知的創造性だけではなく、集団間のコミュニケーションや連携、結束力などに裏打ちされた社会組織によっても支えられたものであろう。体系的な文法と多くの語彙をもつ言語によって、さまざまな情報を伝達することができるようになったことは、その重要な要素といえよう。

進化的な視点からみれば、脳も長い時間をかけて自然淘汰によって進化してきた身体の一部であり、その性能は基本的に生きていくための問題解決プログラムであるはずである。食物を獲得すること、配偶者を見つけること、道具をうまく作ることなどは、いずれも生きていくのに必要な課題であるが、それぞれに関わる認知的プロセスは大きく異なっている。私たちは、真っ白な心で生まれてきてから、こうしたことをゼロから学ぶのではなく、重要な課題については特定のスキルや能力、行動の傾向に関するコンテンツが生得的に備わっており、それが生まれた後の適切な刺激によって発達するというのが実態に近いようである。

してみると、精霊や死霊、神といった、現実世界で直接経験することがない存在については、それに対応する生得的なプログラムが進化の過程で備わるということはないはずである。私たちがそうした超自然的な存在に対してもつイメージは、本来移ろいやすく、共有が難しいものである。しかし、その姿を石や象牙などで表わすことができれば、皆が視覚で確認することができる。触ることも、動かすこともできる。こうした人工物は、そうしなければ漂い流れてしまいがちな超自然的なイメージを固定し、つなぎとめることができる認知的な礎のようなものといえるだろう。ドイツのホーレンシュタインで出土したライオンの頭部と人間の身体をもつ32000年前の象牙像や、ホーレフェルスで出土した4万年前の小さな女性像は、そうした認知的な礎の古い例といえる。

①象徴的遺物としては、こうした具象的表現のほかに、旧石器時代の洞窟壁画や新石器時代ヨーロッパの石室墳、日本の古墳壁画などにしばしばみられる同心円や渦巻き、ジグザグなどの幾何学的な文様がある。デヴィッド・ルイス=ウィリアムスは、こうした図形は変性意識下で「見える」もの(内視現象)であり、儀礼によってトランス状態に陥ったときに見たイメージを表現しているという説を提唱している。これらの文様が示す具体的な意味については、文化によって異なるであろうし、すべてがトランス状態に起因しているということもできないが、共通する図形が広く時代や文化を超えて分布していることは、こうした幾何学的図形に象徴的意味を付すなんらかの共通した認知的基盤の存在を示唆する。

精霊や神を信じることは、果たして私たちの適応力を高めるのだろうか。常にそうであるとはいえないだろう。しかし、集団の結束力を高めたり、規範を維持したりするうえで、こうした信念が存在することが効果的である可能性は高い。社会的階層化が進むとともに、超自然的な信念の共有を促進するための人工物は発達し、古代国家の神殿や神像はその最たるものである。

現代人の多くは貨幣財界の中で生きている。あらゆるものの価値がお金に換算できるという信念を共有することによって、世界的な経済システムが可能になる一方、さまざまな社会問題も生み出している。貨幣は、価値の高さを測り、それを保持し、交換を可能とする人工物である。現代の貨幣の直接的起源は、銅や金、銀といった金属製貨幣で、最初は地金の重さが価値の根拠であった。

貨幣の発達に先行して、特定のモノに価値を見出すという現象が現われる。その初期の例としては新石器時代のヨーロッパや縄文時代の日本列島でみられるヒスイの利用がある。限られた場所ではしか産出しない美しい緑色の石材は、先史時代の人々にとって特別な価値をもつものと認識された。アルプス地方に産するヒスイは主として石斧に加工され、数百 km の距離を超えてヨーロッパ全域に運ばれた。日本列島においても、新潟県で採れるヒスイ製の装身具が縄文時代前期末以降広域に運ばれ、九州や沖縄までも達している。

旧石器時代には、貝殻や動物の牙などを用いた装身具は見られるが、ヒスイに対する特別な扱いが始まるのは、ヨーロッパでは新石器時代中ごろ以降、縄文時代でも前期以降である。金はさらに遅く、金製の装身具などが高い価値をもつモノとして副葬されるのはブルガリアのヴァルナ遺跡で紀元前 4500 年ごろが最古の事例である。

ヒスイや金といった物質が備えている美しい色や輝きは、あたかも高い価値がそれらに内在しているような感覚を呼び起こす。しかし、人類史のある時点までは、それらの物質はほとんど利用されることがなかった。人が普遍的にもっている認知的な基盤と、歴史的社会的状況との相互作用によって、ある顕著な特性をもつ物質が特別な価値をもつようになる。定住化というのが、こうした変化を引き起こす条件のひとつかもしれない。

②特別な価値を見出された物質は、強力な原動力となり、人間の行為や社会のあり方を変えていく。

モノの価値を測り、同等の価値をもつモノを交換する、という発想は、こうした変化のひとつの帰結として出てくるものである。インダス文明では、紀元前 2000 年紀にさかのぼる天秤用の分銅が出土している。最近、弥生時代にも分銅が存在した可能性が提起されている。重さや長さ、量を測るという行為の誕生は、活発な経済活動を可能にし、人とモノの関係が新たな段階に突入したことを示すものである。

本来は、生存のために必要な時に、必要なモノ(食べ物や道具など)があればよかつたはずである。それが、価値という抽象的な概念を通してモノを見るようになると、それを蓄積したり、他者から奪ったりという行為が生まれる。人間の基本的な認知能力自体は、およそ 7 万年前以降は変化していないはずであるが、物質との相互関係のあり方が変わったことで、世界観や考え方は大きく変容してきたといえることができるだろう。

出典：松本直子 2013 「認知進化と人工物」『季刊考古学』第 122 号、pp. 20-21。

設問 1 この文章の内容を 15 行程度で要約しなさい。(80 点)

設問 2 文章中の下線部①、②について一つを選択し、文章の内容に即して日本語で説明しなさい。(20 点)

(問題紙) The Controversial “Primitivism” Exhibition と題する以下の文を読み、設問に日本語で解答してください。

MoMA’s 1984–85 exhibition “Primitivism” in 20th Century Art: Affinity of the Tribal and the Modern is best remembered not for the work it displayed, but for the criticism it inspired.^① Organized by William Rubin, head of the Department of Painting and Sculpture, and Kirk Varnedoe, a professor at New York University who would later join the Museum, “Primitivism” exhibited some 150 works by modern artists like Pablo Picasso, Paul Gauguin, and Constantin Brancusi alongside more than 200 objects from indigenous cultures of Africa, Oceania, and North America.^②

In a review titled “Doctor Lawyer Indian Chief” published in the November 1984 issue of *Artforum*, art historian Thomas McEvilly called out the curators’ omission of “dates of the indigenous works and explanations of their functions, their religious or mythological connections, and their environments.” which in his view resulted in an “absolute repression of primitive context, meaning, content, and intention.”^③ He concluded that “Primitivism” was ultimately a demonstration of “Western egotism still as unbridled as in the centuries of colonialism and souvenirism.”

注：

MoMA = The Museum of Modern Art のこと。ニューヨークにある。

Constantin Brancusi = コンスタンティン・ブランクーシ。ルーマニア出身の彫刻家。

Thomas McEvilly = トーマス・マクヴィリー。米国の美術評論家。

出典：The Controversial “Primitivism” Exhibition

https://www.moma.org/interactives/moma_through_time/1980/the-infamous-primitivism-exhibition/

設問 I.

1. 下線①～③を日本語に訳してください。
2. 文化人類学的観点から “Primitivism” Exhibition の問題点を述べてください (単なる問題文の要約にしないこと)。また、その問題点を克服するためにはどのような方法が考えられるかについて、あなたの意見を述べてください。

設問 II. 以下の語を文化人類学的観点から説明してください。

- ① cultural relativism ② ethnicity

(問題紙)

設問1 考古学研究における文献史料利用の有用な点と注意すべき点を具体的な例をあげながら論じなさい。(70点)

設問2 次の英文を読んで、その要旨を5～10行程度の日本語でまとめなさい。(30点)

In East Asia today, archaeological excavation is primarily a government concern; universities are involved at a low level, and private companies are few and far between. Most data being generated through excavation are subject to the time, budget, and space restrictions of rescue archaeology. This means that locations of digs are generally determined not by specific research problems but by where construction projects are planned. The degree of university involvement in rescue archaeology varies from country to country. In China and Korea, university teams can be called out to large projects – such as for recent dam-site excavations – when needed. In Japan, however, universities boycotted rescue excavations in the early 1970s because increasing governmental demands for their participation left insufficient time to fulfill their teaching and academic commitments (including non-rescue archaeological excavation). This boycott led to the complete separation of rescue and research excavation activity in Japan, with the government developing a huge bureaucracy of public archaeologists. In all East Asian countries, academic excavations tend to be small in scale with little recourse to public funding.

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年4月入学)

2026年度南山大学大学院 人間文化研究科 人類学専攻 (2026年9月入学)

<博士後期課程>一般入学試験

(2026年2月21日実施)

試験科目：専門領域 (文化人類学)

配点：100点

(問題紙) 以下の設問に解答してください。

設問 現代の文化人類学においてどのような意義を持つのかについて言及しながら、博士後期課程におけるあなたの研究テーマおよび具体的な研究計画 (研究手法、スケジュールなどを含む) を詳しく説明しなさい。(1200～1500字)

以上

(問題紙)

1. 自分のこれまでの研究テーマについて、他の研究者の研究と比較しながら説明しなさい。
2. 博士論文のテーマとなる研究について、対立する見解を明示してその違いを述べなさい。

(問題紙)

次の文を読み、下記の設問に解答しなさい。

All major social forces have precursors, precedents, analogs, and sources in the past. It is these deep and multiple genealogies (see chap. 3) that have frustrated the aspirations of modernizers in very different societies to synchronize their historical watches. This book, too, argues for a general rupture in the tenor of intersocietal relations in the past few decades. This view of change—indeed, of rupture—needs to be explicated and distinguished from some earlier theories of radical transformation.

下線①

One of the most problematic legacies of grand Western social science (Auguste Comte, Karl Marx, Ferdinand Toennies, Max Weber, Émile Durkheim) is that it has steadily reinforced the sense of some single moment—call it the modern moment—that by its appearance creates a dramatic and unprecedented break between past and present. Reincarnated as the break between tradition and modernity and typologized as the difference between ostensibly traditional and modern societies, this view has been shown repeatedly to distort the meanings of change and the politics of pastness. Yet the world in which we now live—in which modernity is decisively at large, irregularly self-conscious, and unevenly experienced—surely does involve a general break with all sorts of pasts. What sort of break is this, if it is not the one identified by modernization theory (and criticized in chap. 7)?

下線②

Implicit in this book is a theory of rupture that takes media and migration as its two major, and interconnected, diacritics and explores their joint effect on the *work of the imagination* as a constitutive feature of modern subjectivity. The first step in this argument is that electronic media decisively change the wider field of mass media and other traditional media. This is not a monocausal fetishization of the electronic. Such media transform the field of mass mediation because they offer new resources and new disciplines for the construction of imagined selves and imagined worlds. This is a relational argument. Electronic media mark and reconstitute a much wider field, in which print mediation and other forms of oral, visual, and auditory mediation might continue to be important. Through such effects as the telescoping of news into audio-video bytes, through the tension between the public spaces of cinema and the more exclusive spaces of video watching, through the immediacy of their absorption into public discourse, and through their tendency to be associated with glamour, cosmopolitanism, and the new, electronic media (whether associated with the news, politics, family life, or spectacular entertainment) tend to interrogate, subvert, and transform other contextual literacies. In the chapters that follow, I track some ways in which electronic mediation transforms preexisting worlds of communication and conduct.

Electronic media give a new twist to the environment within which the modern and the global often appear as flip sides of the same coin. Always carrying the sense of distance between viewer and event, these media nevertheless compel the transformation of everyday discourse. At the same time, they are resources for experiments with self-making in all sorts of societies, for all sorts of persons. They allow scripts for possible lives to be imbricated with the glamour of film stars and fantastic film plots and yet also to be tied to the plausibility of news shows, documentaries, and other

black-and-white forms of telemediation and printed text. Because of the sheer multiplicity of the forms in which they appear (cinema, television, computers, and telephones) and because of the rapid way in which they move through daily life routines, electronic media provide resources for self-imagining as an everyday social project.

As with mediation, so with motion. The story of mass migrations (voluntary and forced) is hardly a new feature of human history. But when it is juxtaposed with the rapid flow of mass-mediated images, scripts, and sensations, we have a new order of instability in the production of modern subjectivities. As Turkish guest workers in Germany watch Turkish films in their German flats, as Koreans in Philadelphia watch the 1988 Olympics in Seoul through satellite feeds from Korea, and as Pakistani cabdrivers in Chicago listen to cassettes of sermons recorded in mosques in Pakistan or Iran, we see moving images meet deterritorialized viewers. These create diasporic public spheres, phenomena that confound theories that depend on the continued salience of the nation-state as the key arbiter of important social changes.

Thus, to put it summarily, electronic mediation and mass migration mark the world of the present not as technically new forces but as ones that seem to impel (and sometimes compel) the work of the imagination. Together, they create specific irregularities because both viewers and images are in simultaneous circulation. Neither images nor viewers fit into circuits or audiences that are easily bound within local, national, or regional spaces. Of course, many viewers may not themselves migrate. And many mass-mediated events are highly local in scope, as with cable television in some parts of the United States. But few important films, news broadcasts, or television spectacles are entirely unaffected by other media events that come from further afield. And few persons in the world today do not have a friend, relative, or coworker who is not on the road to somewhere else or already coming back home, bearing stories and possibilities. In this sense, both persons and images often meet unpredictably, outside the certainties of home and the cordon sanitaire of local and national

media effects. This mobile and unforeseeable relationship between mass-mediated events and migratory audiences defines the core of the link between globalization and the modern. In the chapters that follow, I show that the work of the imagination, viewed in this context, is neither purely emancipatory nor entirely disciplined but is a space of contestation in which individuals and groups seek to annex the global into their own practices of the modern.

出典：Arjun Appadurai 2005(1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, the University of Minnesota Press. (下線は引用者が記入)

[設問]

- (1) 下線①の a general rupture を、著者はいかなるポイントに着目して理論的に論じようとしているのか、解答紙4行程度で説明しなさい。
- (2) 下線②の前後の議論を踏まえて、下線②の研究者の議論の共通点を解答紙3行程度にまとめなさい。そのうえで、下線②の中から2名を選び、その共通点に関する彼らの具体的な議論内容をそれぞれ解答紙3行程度ずつにまとめなさい。
- (3) 問題文全体の内容を解答紙8行程度にまとめなさい。

(問題紙)

次の文章を全て日本語に訳しなさい。

'MONUMENT' today carries a double meaning, evoking size and durability on the one hand, and commemoration or memorial on the other. The term derives ultimately from the Latin *monumentum* 'something that reminds' which is related to the verb *monere* 'to remind' or 'to warn'. It was in the early seventeenth century that it was first used to indicate a structure built to commemorate an individual or event, and still later that it took on the looser meaning of something of great size, as in the word 'monumental'. The two facets—to remind and to impress—are inextricably intertwined, since a large durable structure or object evidently provides an effective means of creating a permanent memorial, and of passing on meanings and messages between generations. The messages themselves need not always be those intended by the originator of the monument, since later observers may interpret them in entirely novel and culturally specific ways. Hence monuments carry meanings far beyond the contexts of their original creation.

The construction of a monument is a consummately cultural and ideological undertaking, be it the carving of a stone or the building of a pyramid. Monuments are closely associated with social observance of death and the supernatural, and embody cosmologies in durable form. They offer unique and challenging insights into the beliefs and ritual practices of early societies. Yet they are also mutable and contingent forms, frequently reused and reinterpreted across the passage of generations. The special quality of monuments is to take ritual and cosmology beyond the realm of the domestic and quotidian, and express or embellish them in a special, dedicated setting.

Monuments are highly diverse in their form, character, and age. They include prehistoric standing stones and earthen enclosures, massive obelisks and pyramids, and memorials to the dead of recent centuries, including to those killed by conflict or natural disaster. This chapter will explore the significance of monuments in ritual and religion from the perspective of prehistoric and early historic societies, illustrated by examples from North and South America, Africa, and Europe.

(出典) The Oxford Handbook of the Archaeology of Ritual and Religion by Timothy Insoll (ed.), Oxford University Press, 2011,
Reproduced with permission of the Licensor through PLSclear.

発行：南山大学 入学センター

名古屋市昭和区山里町 18 番地

Phone : (052)832-3119

E-mail : nyushi-ka@nanzan-u.ac.jp

U R L : <https://www.nanzan-u.ac.jp/>